



「アイヌ先住民研究センター」オープニング公演

本年4月から、北海道大学に「アイヌ・先住民研究センター」が設置されました。当館では、同センターから依頼をうけ、14日に行われた開設記念式典で事業の成功を祈願するカムイノミ、芸能公演を実施しました。

センター長の常本照樹氏は、開設の主眼を日本におけるアイヌの権利を法的に探っていくこととしているほか、アイヌの若い世代から研究者を育成することも掲げています。新聞報道では「アイヌの先住権確立を目指す」というコメントも出ており、国立大学がこのような取り組みを行うことは大変意義深いことといえます。



カムイノミの様子。前列右が常本氏

公演では、ムツクル演奏、鶴の舞、当館の新たな定番となりつつある口承文芸のほか、新しい取り組みとしてトンコリ伴奏による踊りも披露しました。このために新調した衣装・飾り帯とともに好評でした。また、アイヌ語による祝辞を述べ、センターの事業が単なる研究ではなく、真にアイヌのための取り組みとなるようメッセージを送りました。公演の最後には、参加者も含めてイオマンテリムセを行い、北大総長、ウタリ協会理事長も踊りの輪に加わっていました。

(北原次郎太)

春のコタンノミ・チッサンケ

4月28日(土)、ポロチセにて、春のコタンノミを実施しました。ヒエやタバコなどを病神に捧げるハルエオンカミ(病魔除けの祈り)を行ってから、カムイフッチ(火の神)、チセコロカムイ(家の守り神)、ヌサコロカムイ(幣場を司る神)に自然の恵みへの感謝や、豊作、安全を祈願しました。その後、ヌササン(祭壇)に祭る自然界の神々に祈りを捧げ、シンヌラツパ(先祖供養)では、祖先に供物と言葉を捧げました。

儀式終了後は、参加者みんなでオハウ(スープ)などの伝統料理を食しました。

コタンノミの後は、丸木舟を下ろす儀式、チッサンケを実施しました。祈りを行い、チッ(丸木舟)を手草で祓^{たくま}って^{ほら}から、下ろしたチッで湖を周りました。チッは、秋までポロト湖に浮かべています。

(木田瑞恵)



教育大学札幌校新入生研修

4月19日と20日の2日間、北海道教育大学札幌分校の教官・学生60名が、当館で学習を行いました。一行は、今春入学した新入生で、2グループに分かれて学芸員講話・体験学習・ディスカッションなどを行いました。



団子作りのため米を搗く

伝統料理体験学習では、1日目はA班が、2日目はB班が実施し、チェポハウ(スープ)、シト(団子)、昆布だれ、ペネコシヨイモサヨ(しばれ芋団子のお粥)、エントウセイ(ナギナタコウジュ茶)、カンポチャラタシケブ(カボチャの和え物)、チマチェブ(焼き魚)を調理しました。調味料はどのようなものを使っていたのか、何を栽培していたのかなどの積極的な質問が出されていました。(木田瑞恵)

学芸員講話は、2グループ合同で実施しました。歴史・文化に関する基礎的な知識を確認するとともに、現状についての説明、従来のアイヌ文化学習の傾向にも触れました。特に、アイヌの現状は、一人アイヌのみで形成しているものではなく、隣人である日本人とともに構成している現代社会そのものであること、俗に言う「アイヌ問題」とは「日本問題」であり、アイヌの現状を改善するには、日本人の自己変革が必須であることを強調しました。

体験学習後の講話であったため、学生達も疲れていたはずでしたが、熱心に聴講していました。終了後は「日本人は変わるか、という問いに考えさせられた」という感想が出されました。教官からは「新入生には少し難しかったと思うが、次年度に向け、学生にどのような学習をさせればよいかわかった」というコメントがありました。(北原次郎太)

台湾からの団体旅行客多数来館

近年、アジアからの来館者が増えてきました。今月18日、20日、21日の3日間、台湾の保険会社ご一行(約1600名)が褒賞旅行として来道し、当館を訪れました。その時の様子をお知らせします。

古式舞踊公演見学では、チセが満員になり、数人のお客さまがステージに上がって踊りの輪に参加するなど、大変な盛り上がりを見せました。公演後はムックル演奏体験を実施しました。通訳を介しての説明でも、多くの方がムックルを奏でることができ、好評でした。自由見学では、着物を着た職員が記念撮影のため引っ張りだこで、大忙しの3日間でした。(木田瑞恵)



事業のご案内

- パイカラコタンノミ(春の村祭り) 4月28日(土) 10:30~12:00 当館ポロチセ
- チブサンケ(舟下ろしの儀式) 4月28日(土) 13:00~ ポロト湖畔
- アイヌ語教室 初級編 ・5月27日(日) ・6月23日(土)
中級編 ・6月16日(土)

時間:17:30~19:00 講師:本田優子氏(札幌大学教授)